



「つくられる共同体」の社会学的研究－共同体運動の現代的意味と新たな展開－

田，恩伊

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2012-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5548

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005548>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文審査の結果の要旨

氏 名	田 恩 伊		
論文題目	「つくられる共同体」の社会学的研究 —共同体運動の現代的意味と新たな展開—		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	鷹 茂 印
	副 査	教授	三上剛史 印
	副 査	准教授	青山 薫 印
	副 査	阪南大学 教授	村田充八 印
	副 査		印
要 旨			
本研究は、現在さまざまな形で実験的に展開されている「新しい共同体」を、インテンショナル・コミュニティ（Intentional Communities: 以下ICsと表記）という概念に着目して、社会学的に叙述可能なものにすることを目指している。論文中では、これを「つくられる共同体」という概念で捉えているが、それは「共同体は自然発生的なものであり、本来はつくられないものだ」という、共同体に対する伝統的解釈への批判としてあり、新たな視点を提示するものである。ここでは「つくられる共同体」を新たなアソシエティヴ・生活共同体として位置づけ、親密圏と公共圏の交差する新しい領域として提示し、主に日本と韓国の共同体の事例を用いて実証的に検討している。 【論文の構成】 論文は、第一章から第6章、ならびに結論から成っている。各章の内容は以下のように要約される。 第一章では、社会学における伝統的な「共同体」論を再検討し、先行する理論的研究を踏まえた上で、共同体を「つくられる」ものとして捉え直し、共同体の新たな展開を説明するための、理論的手掛かりを探るものである。			

第二章は、「つくられる共同体」を分析するための概念として「ICs」という概念を導入し、この概念の歴史的変遷を独自の文献資料を加えながら検討している。特に、ICsがあるタイプの共同体を表す言葉としてアメリカで使われ始めた1940年代前後に注目し、当時の共同体運動を相互に結びつけ、その内容と関連性を考察している。

このようなICs概念の歴史的考察を経た後に、第三章では、日本、韓国、アメリカにおいて実践されているICsの調査結果に基づいて、今日のICsに見られる「宗教的・スピリチュアル」共同体と「エコロジカル」共同体との関係を検討している。とりわけ日本のICsにおいて、90年代辺りから「宗教」と「共同体」に対する回避的な共通感覚が存在していたことに注目しつつ、今後日本においては「エコロジー」が多様な小集団の誕生を動機付ける要素となり、新たな展開を生み出す可能性があることを示している。

第四章と第五章では、日本の共同体運動を歴史的な流れにそって捉え、戦後の共同体運動全般を明らかにし、70年代前後の「つくられる共同体」運動と90年代とではどのように異なっているかを文献資料と参与的観察を伴ったフィールド調査、ならびに当時の関係者たちへのインタビューに基づいて実証的に検討する。その上で、「つくられる」共同体の中で体質の変化が顕著になり、一般社会との区別が消滅し解体していく傾向があることについても考察している。このような実証的研究によって、日本の共同体が多様な変化を遂げてきたことを明らかに、今日のICsは、その内部に複数の結社体や組織をつくることによって、さまざまな形で実験を通して、共同体の統合と維持に努めていることを明らかにしている。

第六章では、90年代から活発化した市民的公共性論及び新しい中間集団論に注目し、「新しい公共性」の担い手としてのICsについて、その現状と可能性を考察する。そのためにまず、1990年代前後に登場した日本の共同体の詳細を探り、また海外の事例の一つとして韓国の共同体を取り上げ、日韓共同体の共通点と相違点を明確化する。また、ICsを古いタイプの中間集団や新しい中間集団とも異なるアソシエティヴ・生活共同体として新たに位置づけ、親密圏と公共圏が交差する新しい領域として示すことを試みる。韓国の共同体は従来の家族形態をより社会化された親密圏へ拡大しようとし、日本の共同体は血縁関係を越えた新しい家族形態を形成し、それによって共同体の結束をはかろうとする動きが目立つ。今日の共同体においても、もちろんその出発点は一般社会への異議申し立てとしてあるが、現代の福祉国家システムが抱える諸問題を解決しつつ、同時に公共性のある空間を確保しようとする模索が行われている。

結論的には、「つくられる共同体」をグマインシャフトとゲゼルシャフトの相互肯定関係線上に位置づけ、「親密圏」と「公共圏」が交差する新たな場として、今後の可能性に期待するという形にまとめている。

本研究は現代の共同体運動について、その意義と展開を研究したものであり「つくられる共同体」について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって学位申請者の田恩伊は博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお本研究の一部は、すでに以下の学術雑誌等に論文の形で掲載されている。「日本のインテンショナル・コミュニティ」『ソシオロジ』第55巻第3号（2011年）、「創られる共同体」『国際共同研究「公共圏と多元的近代の社会学理論」成果報告書』（2010年）。

論文要旨

氏 名 田 恩伊

専 攻 グローバル文化・先端社会論

指導教員氏名 三上剛史 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

「つくられる共同体」の社会学的研究

—共同体運動の現代的意味と新たな展開—

論文要旨

近年、市民的公共性と新しい中間集団の役割とその機能に疑いを抱きつつ、共同性をより具体的に現実化しやすい場として、共同体、コミュニティ、連帯、インテンショナル・コミュニティ、トランジット・タウン、リローカリゼーションという言葉が社会学の言説および社会的実践の中で頻繁に使われるようになった。近代が作り出した社会・政治・経済的構造や規範がグローバル化の下で大きく揺れ動いている中、複数の近代 (Multiple Modernities)、第2の近代など、「近代」に対する新たな問いとローカリティの再検討も求められている。そして、これらに反応する多様な社会的結合体及び小集団の登場とその実践の試みが大きく注目されつつある。これらの形態や展開もまちまちで、既存の社会学的概念の中では説明できない様相を見せており、これらを社会学的に捉え直そうとする試みによって、共同体に対する再考察や多様な解釈が登場してきている¹。

¹ 「これらの変動や展開に由来する共同体の表現形態は、オルタナティブでユートピア的共同体から、伝統的な村落や産業都市の地域社会、国境を越えるディアスポラやヴァーチャルコミュニティに至るまで」(G.Delanty, 2003, 訳書4頁)の様々な形態で現れている。

この研究は共同体と社会との関係及び社会政策との関連に対する強い関心から始まっており、インテンショナル・コミュニティ (Intentional Communities: 以下 ICs と表記) という「新しい」共同体をどのように社会に組み入れていくかを明らかにしようとする立場に立っている (Dierschke, Drucks, Kunze, 2006, p102)。そして、こういった「つくられる共同体」に対する現代的意味と再解釈の新しい動きを捉え、それを主に日本の共同体の変遷と状況に照らし合わせ検討することを目的としている。

まずこの研究では社会学における伝統的な「共同体」論を検討し、その先行する理論的考察を踏まえた上で今日の共同体の新たな展開を説明できる根拠と手掛かりを探ってみることにする。かくして共同体をめぐる学說的・実践的展開の新たな可能性を伝統的な理論の中で検討し、さらに今日社会的事実として着実に広がりつつある「つくられる共同体」、つまり ICs 型共同体のさまざまな展開を、それ自体として記述可能なものにしようと試みると同時にその社会的構成を目指してみる。したがって、この研究は新たな方向性へ向かって展開されている現状としての共同体・共同体論の今後を展望する端緒的な役割を果たす考察であり土台づくりを目指すものであって、新しい共同体論の全体像を提示するものではない。

本稿で度々言及している「つくられる共同体」という表現は、特定の概念としてではなく「共同体は自然発生的なものであり、本来つくられないもの」だという共同体に対する伝統的かつ図式化された解釈に対する、本稿の新たな視点を明確にするためである。本稿では、こういった「つくられる共同体」という視点を、差し当たってはインテンショナル・コミュニティという概念に対応させ、その理論的・実践的分析を試みるものである。

ICs については、主に外国の論文と2次資料、アメリカの FIC (The Fellowship for Intentional Community)²の資料とデータベースを参考にした。また日本の ICs については、7つ以上の共同体グループのフィールド調査、60年代～70年代の研究文献や2次資料、共同体運動の主役だった人々やメンバー達に対するインタビュー調査に基づいて分析を行った³。韓国の ICs については、日本と同じく6つの共同体のフィールド調査、関係者

² FIC(The Fellowship for Intentional Community): 北米を中心に活動しているICsのネットワーク団体。2007年現在、北米と世界40ヶ国の1千数百のコミュニティ団体が登録されている。オンラインを通してコミュニティが自ら登録できるようになっているので、オンライン登録の数は正確に定められない。Communities Directoryを出版して、世界のインテンショナル・コミュニティの詳細な情報を提供している。アメリカが拠点となっているので北米のコミュニティ登録件数が78.8%占めている。

³ 2006年から2011年にかけて「新しき村」「一燈園」「大倭紫陽花邑」「山岸会」「茗荷村」「木の花ファミリー」「心境荘苑」の7つの共同体を数次訪問し、該当共同体の創立に関わったメンバーと現在の住人たちにインタビューを行った。また参与的観察者として1回の訪問当たり平均1日～3日間を滞在したが、長くて約1ヶ月間を滞在した共同

たちへのインタビュー、共同体グループが行う行事への参加などに基づいた。韓国の場合は、本稿で取り扱う ICs 型のつくられる共同体の歴史が日本や欧米に比べて遥かに短く、研究文献や2次資料が乏しいため、殆どフィールド調査に基づいて分析を行っている。

本稿では、第一に、共同体に対する社会学の伝統的な解釈を検討し、共同体を「つくられる」ものとして捉え直そうとする新しい理論展開の試みを紹介する。第二に、本稿の中心テーマである ICs の概念と ICs の歴史的変遷を紹介する。特に ICs が「つくられる共同体」の通称としてアメリカで公式的に使われ始めた 1940 年代前後に、類似する共同体運動が別のグループからもファーム運動を含む社会運動として行われていたことに注目し相互を結びつけ、その内容と関連性を考察する。第三に、「宗教的・スピリチュアル」共同体と「エコロジカル」共同体との相関関係を社会のエコロジー現象と ICs の「現在的 (contemporary)」性格とを関連付けながら考察し、さらに日本の ICs に焦点を絞り、日本の社会のエコロジー現象と共同体づくりのかかわりを検証する。第四に、戦後の日本の共同体理論が「運動家や政策家の理念的な‘共同体主義’へ」と(北原、1996、56 頁)ポジティブに転換した 70 年代頃に、ICs 概念に基づいた共同体運動が活発に展開されたことに注目し⁴、戦後の共同体運動全般を明らかにし、90 年代とではどのように変わったのかを独自の文献資料と事例研究に基づいて探る。第五に、90 年代から活発化した市民的公共性論及び新しい中間集団に注目し、「新しい公共性」の担い手として ICs の可能性を探求し、その現状と可能性を考察する。そのために、1990 年代の前後に登場した日本の共同体を詳細を探り、また海外の事例の一つとして韓国の共同体を取り上げ、市民的結合態である日韓共同体の共通点と相違点を検討する。また、ICs を、旧の中間集団でも、新しい中間集団でもないアソシエーティブ・生活共同体として新しく位置づけ、親密圏と公共圏が交差する新たな領域を叙述可能にすることを試みる。そして、学問的及び実践的分野において今後さらなる展開が予測されている「つくられる共同体」の新たな可能性に一つの足場を用意してみる。

体もある。「心境荘苑」と「一燈園」以外の五つの共同体では書面アンケート調査も行っている。60年代と70年代の日本のICs運動分析には、『月刊キブツ』(1969年～1973年、全巻)と『名前のない新聞』(1974年～1977年、月間もしくは隔月間)を主として参考にしたが、この二つの刊行物に関わった当時の編集・取材担当者へのインタビューも行っている。

⁴ 1971年『月刊キブツ』は、「アメリカ・コミュニンの群像」という特集を組んでおり、The Modern Utopian (Alternatives Foundation)の編集責任者フェアフィールドが中心になって書いたアメリカ・コミュニンの一部翻訳を紹介している。ここでICsを新しい共同体を称する一つの言葉として紹介しているが、今日FICが分類しているようなICs共同体の形態は書かれていない。アメリカに於ける当時の共同体運動(コミュニン)が日本と深くかかわっていたことは、当時の共同体運動の関係者達の人脈と交流、そして当時日本に入ってきた書籍から確認できる。